



特別寄稿

野呂進 陸上競技人生を振り返る <後編>

(専修大学商学部 教授／専修大学陸上競技部 元部長／専修大学スポーツ研究所 顧問)

聞き手：佐藤 雅幸 (専修大学経済学教授／専修大学スポーツ研究所所長)
 満園 文博 (スポーツジャーナリスト／専修大学講師)
 首藤 正徳 (日刊スポーツ新聞社 東京五輪・パラリンピック準備委員)

構成：木村 啓司 (体育施設出版)
 佐藤 雅幸 (専修大学)

写真提供：日刊スポーツ
写真撮影：津野田そのみ

「選手を泳がす」指導術

佐藤 専修大学陸上競技部で長きにわたり多くのランナーを育ててこられた野呂先生に、これまでの陸上競技人生について振り返っていただきます。

前回(2014年度発行)は陸上競技を始めた経緯、中学、高校、大学における指導者との出会いからアジア大会千五百mで優勝した選手時代の話題を中心に語っていただきました。今回はそうした恩師との出会いが野呂先生の指導法に影響したのか、現在の学生アスリートの育成についてお話していただきます。

前回に続き、文学部人文・ジャーナリズム学科においてスポーツジャーナリズム論の講師を担当され、野呂先生を選手時代に取材されてきたスポーツジャーナリストの満園文博さん、昭和63(1988)年経済学部経済学科卒業の校友で、日刊スポーツ、東京五輪・パラリンピック準備委員の首藤正徳さんを交えて進めていきます。



満園文博氏

満園 僕と首藤さんは20年以上の付き合いで、国内外のスポーツの現場でともに取材してきました。今年度のスポーツジャーナリズム論の授業の中でも、首藤さんに、大学の後輩にあたる学生に体験談を交えて話してもらいました。

首藤 私は在学中に都内のジムに所属してボクシングをしていました。記者としては1990年代、2004年と2005年に箱根駅伝を取材しました。今回は野呂先生のお話を聞きたくて参加しました。

佐藤 さて、野呂先生が陸上競技の指導者を意識し始めたのはいつ頃だったのでしょうか？

野呂 僕が日本体育大学(以下、日体大)に進もうと考えていた頃には「高校の体育教師になって陸上部を指導したい」と思い始めていました。インターハイを目指す陸上部を指導したいという気持ちの方が強く、大学で箱根駅伝を指導す

るという発想は、まだありませんでした。

満園 僕も九州、鹿児島県出身だからわかります。箱根駅伝をテレビ中継するのはこれよりずっと後のことですから、当時は地方にいと箱根駅伝はあまりピンとこないものです。

野呂 まして僕は長距離ではなく、中距離が専門でしたから。日体大に入学して初めて「箱根駅伝を走らなくては」と感じ、長距離に籍を置いたものです。高校でも寄せ集めメンバーではありましたが駅伝を走りました。インターハイも魅力的ですが、「高校の指導者になって駅伝という種目を指導したい」という気持ちが芽生えていました。

日体大に入ると、まだ20代後半だった岡野章先生に教わるわけですが、岡野先生も完全に管理するタイプの指導者ではありませんでした。

入学した年、実業団出身選手が4人入ってきて、選手層が厚くなり、まさに日体大が強くなり始める時期でした。岡野先生は学生の勧誘も一生懸命でした。その後、僕らが4年の時に初めて日体大が箱根で総合優勝しますが、登録14人中7人が4年生でした。

岡野先生はその頃、学生の自主性を尊重してくださっていました。入学した頃、長距離を走るのは大変でしたが、2年になると走れるようになっていました。僕なんかはその指導で「うまく泳がされた」部類です(笑) 僕が千五百の大事な試合があり、長距離よりも中距離の練習をしたいと伝えると「いいよ」と許してくださるし、2年上の采谷義秋先輩はトラックの練習が嫌いな



首藤正徳氏



1970年 第54回日本陸上選手権 男子1500m 決勝(ゼッケン440番)

方で、練習が始まるとすぐにそそくさと解散し、多摩川沿いを走りに行っていました。

満園 采谷さんは根っからのマラソン選手でした。広島で高校教員をしながら、そのままミュンヘン五輪の代表に選ばれた、市民ランナーの元祖のような方です。確かにトラックレースのイメージは全くないですね。現代の高速マラソンとは対極に位置するようなタイプのランナーでした。

野呂 采谷先輩は大学時代、トラックの試合に出なかったものです。

佐藤 岡野先生の指導法を聞いて思い出しましたが、昨年、「素質か能力か」といったテーマのシンポジウムがありました。フロリダ大学のエリクソンという学習理論の最先端を行く教授の話によると、ある分野で大成する子どもというのは、幼少期に一人で考える時間や、自分で何かを編み出す時間が多い傾向があるそうです。それに対し、ずっと管理されてきた子どもというのは、問題解決能力が前者より劣る傾向があるという研究結果だそうです。

満園 メリハリが大切ですね。体罰まで駆使して徹底的に管理する指導というのは、ほんの一時、一定の成果は上げるのかもしれませんが、卒業などでその指導から離れた時、これまでやらされていたものだから自ら考える能力、自主性がなく、どうやって練習すればいいかが分

からない。そういった話は取材でも耳にします。日本の運動部にはありがちですが、高校野球がその最たるものです。そういった環境で育った子供が指導者になると、同じ方法で指導するそうです。

中学時代の丹藤先生、高校の成田先生という、新しいことにチャレンジしたり、自分で考えさせたりする指導を受けたことが大学につながっていったのですね。そして、野呂先生自身が指導者となり、やはり選手を管理しすぎない指導法を取り入れられた。実際それで選手は強くなっていくものですから。

野呂 振り返ると、中学時代に丹藤先生、高校で成田先生に指導を受けた延長上で、大学では自主性を重んじてくださった岡野先生に指導を受けることができたという流れは僕の陸上人生にとってとても重要なことだと思います。

首藤 当時の大学の指導者として岡野さんは珍しいタイプだったのでしょうか？

野呂 例えば順天堂大の帖佐寛章先生はしっかり見るタイプです。埼玉県庁から大東文化大に行った青葉昌幸先生、中大の西内文夫先生もよく見ていましたね。日大の水田信道先生は横浜の方の付属高校の教員でしたから付きっきりというわけにはいかなかったし、有力選手が集まった早稲田は指導者不在で低迷した時期でしたね。

佐藤 野呂先生は陸上競技の指導だけでなく、専修大のスポーツ科学研究所の所長という上司の立場でも部下を泳がせる方針でした。おかげで私たちは仕事しやすかったです。目配りしてもらいながらも、「とにかくやってみろ」というふうに自由に組み合わせてもらいました。

野呂 僕が箱根に出場したのは2年の時1度きりです。この時はアンカー(10区)を担当しました。采谷先輩から襷を受け取り、中大の選手1人を抜いたのですが、1秒差で区間順位は6位、チームは総合5位でした。4年の時、日体大が初優勝しましたが、その時僕は補欠でした。日体大は初優勝から5連覇しました。

満園 そもそも野呂先生は千五百mの中距離ランナーであり、20kmを走る長距離選手ではありませんね。

野呂 だから、僕は箱根に出場するまでの2年間で30km走は1回しか走った記憶がない。いまの選手なら週に1、2本は30kmくらい走っているでしょう。そんな選手を使う岡野先生も岡野先生ですが(笑) 僕は「きっと補欠だろう」と思って気楽に構えていたら、最終の合宿を打ち上げた12月25、26日頃に突然、岡野先生から「お前だ」と告げられたのです。4年の先輩からは「俺だと思っていたのに、何だよ」と言われましたが。

満園 4年生にしてみれば、これが千載一遇の

チャンスという思いが強いですから、残り2年ある野呂先生が選ばれたらそう言いたくもありません(笑)

野呂 在学中は日体大の黄金時代にも重なっていて、いろいろな思い出があります。2年の時、有志で「箱根で優勝する会」を立ち上げました。といっても月に一度集まって飲んでいただけですが(笑) 1、2年の頃、春先のトラック練習にまったく来ない上級生がいました。夏休み前に現れて本格的な練習を始めるのです。でも、岡野先生はそれを咎めることはなかった。「最終的に箱根に間に合えばいい」という感じでした。僕らの学年の頃から良い選手が集まるようになり、4年のとき初優勝しました。良い選手が多くなり、実業団出身選手のように個性の強い選手もいましたから、まとめ上げる岡野先生は大変だったと思います。それでも個性を大事にしながら、選手をうまく泳がしてくれました。卒業後も大学に残り、間近で岡野先生の指導法を学ぶことができたことは、本当に貴重な体験でした。

この時期が日体大の箱根5連覇の時期とも重なるのですが、岡野先生の采配を見ていると、「なぜこの選手が2区に？」という選手をエース区間の2区に起用したり、山下りにめっぽう強い選手がいて「この選手は6区ですよ」と僕が提案すると、そのまま採用してくれたりすることがありました。そういう経験をさせてもらっても、指導する立場になってからは、選手の選び方、走らせる区間の決め方、それをいつ、どのように決めて、選手に伝えるかということは、ずっと悩ましかったです。

満園 興味深いのは、岡野先生のもとに残って指導者になった野呂先生が選手の自主性を重んじるタイプの指導者になり、同じく帖佐先生のもとで鍛えられた澤木啓祐さんは管理するタイプの指導者になりました。振り返ると確かに当時は岡野流と帖佐流という二つの潮流があったのだと思います。岡野先生は選手の自主性を重んじつつ本人に責任も負わせるから、練習をしなければ本人にはね返ってきます。選手はガミガミ言われない代わりに自らの責任で考えて練習しなければなりません。管理の手法を履き違えてスパルタ式を徹底した結果、体罰に行き着く指導者も昔はいたとよく聞きます。岡野先生はまったくそういうところがありませんね。

野呂 指導法は異なりますし、しのぎを削るライバル関係だったのですが、岡野先生と澤木先生はものすごく仲が良かったです。

満園 指導法としては対極の関係にある二人ですが、目指すところは同じだから気脈を通じるところがあったのでしょうか。

首藤 岡野先生の人柄が表れていますね。

満園 自主性を重んじることが良くて、管理が悪いとも、その反対のことも一概に言えないです。大学生なのだから当然、管理をしなければならぬ面もあるでしょうし、自主性を育てなければならない部分もある。自主性という言葉は聞こえは良いですが、一歩間違えると、単なる「野放し状態」になってしまいます。自主性プラス管理が必要ですが、そのバランス、比率、割合、按配といった言葉がカギになってきますね。

野呂先生の場合は、出会った指導者によって自主性を大切にすることになった。そういう運命だったのかもしれないですね。

野呂 大学3年(1967年)の時に東京ユニバーシアードがあり、1500mに出場しました。その事前合宿の時に、日大の水田先生にこのように言われました。

「お前は、日体大に行ったからこうなったんだ。他のどの大学に行っても、こうはなれなかったかもしれない。実技の授業などで鍛えられた部分もあるだろうし、なにより岡野さんの指導を受けることができた。お前には日体大が合っていたんだ。」

他の大学の指導者からもそういうふうに見られていたのですね。

現役引退、専大の指導者として

佐藤 日体大に残るきっかけは何だったのですか？

野呂 栗本義彦学長から「就職の心配はするな」という言葉をかけてもらったことです。だから青森県の教員採用試験も受けずに現役を続けることができました。岡野先生の指導を手伝いながら、自分の競技も続けることができました。当時、日体大にはまだ大学院がなかったので、4年生を卒業し、最初は副手、次いで助手、そして専任講師となり、その後専修大へ移りました。日体大には卒業後に8年間、学生時代を合わせると12年間お世話になりました。

満園 僕は野呂先生の全盛期に「日体大教」という肩書で走っていた姿が強く印象に残っています。

佐藤雅彦 専大は駅伝を強化したかったので、野呂先生はいま風の言葉で言えばヘッドハントさ

れた形ですね。

野呂 ちょうど現役を退いた時期でした。また、大学駅伝で指導するためには、岡野先生のもとを離れ、独り立ちしなければならぬという思いもありました。そして、岡野先生が非常勤で専大に来ていたこと、日体大の先輩である野瀬先生が専大で駅伝の監督を務めていて「駅伝の面倒を見る人がほしい」と声をかけていただいたこと。こうしたことが重なって専大に移って来たことが始まりです。

もろもろ手続きなどがあり、4月の末ごろから現場に入りました。ちょうど僕が30歳の時のことです。

専大で僕はそれほど強い選手を育ててはきませんでした。卒業しても実業団で駅伝を走る選手が大勢います。卒業後の進路は自由ですが、僕が育てた学生には陸上競技の楽しさを知り、好きになって、卒業後も続けてほしいという思いがあります。

そして、多くの指導者が口にする言葉ですが「当たり前が当たり前でできる人間になってほしい」という考えが僕の指導の基本にあります。

国内留学中の研究活動

専大の監督を離れてから2010年に東海大体育学部の陸上競技研究室(新居利広教授)に1年間、国内留学しました。そこで箱根ランナーの練習方法やコンディショニングについて研究しました。まずは、日体大が初優勝した時の1年間の練習や、僕自身がやった練習、そして留学先の東海大の早川翼、村澤明伸の練習を調べました。調査を進めると、近年、フリー練習があまりに少なくなっていることが分かってきました。日体大が初優勝したときは年間合計で2カ月近くフリー練習の期間がありました。

1週間のサイクルの中でフリー練習の日を設けるという手法は今でもありますが、「解散」という形で丸々3週間近く「お前の好きなようにやってこい」というような練習が徐々になくなっていき、現在の学生ランナーにはほとんどないのです。

4日以上連続したフリー練習の期間を設けた日数の年間合計を比較すると、日体大が初優勝したときで68日、僕が専大に来てから最高の4位になった第69回大会の時は50日ありました。その後、加藤覚監督の時期は12日間になり、管理が進んだことがうかがえます。

満園 監督に就任したことで責任感を背負ってしまっ、新しい監督ほど管理したがるのか

もしれないです。

野呂 実際は1日、2日のフリー練習の日が複数あるのですが、4日以上連続して監督が手放すということが少なくなっているということです。

加藤監督と同時期の東海大学を調べると23日でした。日体大が初優勝した時などと比べると東海大も少ないですが、同時期の専修大と比べると約2倍ありました。おそらく今の専修大は更に少なくなっていると思います。専修大に限ったことではないのかもしれませんが、管理が進んだことで選手に良い結果をもたらしているのか検証する必要があると思います。

満菌 選手の個性も失われて「作られた選手」になっていくでしょう。自分で考え工夫して与えられた時間を消化すると仲間同士でも練習することができて互いを高めていくことができます。そういう機会がなければ、与えられた課題をこなすだけの選手になってしまいかねないです。選手一人ひとりの才能は異なるはずなのに同じような選手ができあがっていき、1人が崩れると総崩れしてしまうリスクが生じます。

首藤 将来その中から指導者が出てきたとしても、指導方法の選択肢が乏しい指導者になってしまいますね。

満菌 それはおそらく、箱根だけを見据えているからでしょう。もっとアジア大会でも世界選手権でもいいので、他の大会にも目を向けていただきたいものです。それによって違った個性が生まれるのではないのでしょうか。

佐藤 将棋にたとえると、「指し手の間隔」と「駒的感覚」というのでしょうか。「自分は駒だ」と思い始めたら、発想力も養えないし、考えるエネルギーも枯渇していくでしょう。

野呂 選手の中には、「その方が楽で良い」と考える者もいるかもしれない。でも、それでは卒業後が心配です。

今の学生は1年中、自分のやりたい練習メニューがまったくできずに、ずっと管理された状態で練習しており、見ていてかわいそうになってきます。僕は1週間から2週間、夏休み前にフリーの期間を設けるのです。ちょうどトラックとロードの切り替えるタイミングです。そして練習のスケジュールを出させるとみんな、すごい内容のスケジュールを提出してきます。ところが、後で練習の結果を報告させると、スケジュールと異なるものが出てくる(笑)



昭和46年(71)1月3日
第47回箱根駅伝・日体大3連勝
奇跡の大逆転・第10区

1971年 第47回箱根駅伝 優勝(日体大コーチ時代)

自分で組み立てた練習を2週間してみると、本人もスケジュールを立てる大変さが分かってくるものです。今の学生を見ていると、与えられた練習はしますが、自分自身を1年間どうしていくのかというビジョンや、自己管理していく能力については欠けてしまっている気がします。自立していくためには、自分で考えさせる必要があると思います。

指導者と選手

満菌 日本の陸上競技界全体から見ると、良い傾向ではないです。箱根をはじめ大学駅伝では通用して、チームプレーはできるかもしれないけれど、いざ一人で世界を目指すとなった時、何をすればいいのかわからない。そういう意味で

は良い面も悪い面もありますね。

ただ、あまり自分だけで考えさせると、これもまたダメなわけで、きちんとした規律がある中で、「この部分については君が責任を持ちなさい、この部分については私が責任を持つよ。この期間は自分の責任でやらせるけれど、その代わり遊んで飲んで暮らしちゃいけないよ」と一応言っておかないとならないですね。

取材で佐倉アスリート倶楽部(SAC)代表の小出義雄さんと話す機会がありますが、よく言われることの一つに「学校があるから子どもたちがいるのではない、子どもたちがいるから学校がある、子どもたちがいるから先生がいる」というのです。これを履き違えている指導者があまりに多いと。指導者がいるから選手がいるのではなく、選手がいるから指導者がいるのです。



1992年 全日本大学駅伝(第4位入賞)

主役はあくまで子どもであり、選手です。指導者がすべきことは、選手を雁字搦めにするのではなく、見守りながら良いところを伸ばしてあげて、悪いところは修正するということを繰り返す作業です。指導者がふんぞり返っているチームは成功しないし、そういう指導者に教わった子どもたちは、巢立っていても連鎖してそういう指導者になってしまうでしょう。小出さんの考え方はもっともだと思います。

もう一つ。小出さんの興味深いところは、有森裕子さんが現役時代、オリンピックでメダルを獲得していた頃に「有森先生」と呼ぶことがありました。それには理由があって「有森裕子がいるから僕は存在できる。じつ是有森は僕より偉い先生なんだ」というのです。もし、小出さんが有森さんを徹底的な管理主義で指導していたら、あれほど強くはなっていなかったでしょう。小出さんは有森さんの言い分も聞いてあげて自主性を重んじていました。

重要な点は何のくらい管理するのかという比率なのでしょう。それを選手によって微妙に調整を調節し指導することが指導者の巧みさです。きっと野呂先生が日体大で経験した練習方法にも通じるでしょう。有森さんが日体大出身ということにも繋がっているのかもしれない。

野呂 小出さんの話で思い出しましたが、僕が大学を卒業し、そのまま競技を続けながら岡野先生を手伝っている時、岡野先生は僕のことを「野呂先生」と呼んでくださっていました。岡野先生は卒業した教え子であれば僕に限らず「先生」を付けて呼んでいました。そういう経験があったので、僕も指導する立場の人には年齢を問わず皆「先生」を付けて呼ぶことにしています。

佐藤 その通りです。私も野呂先生に「佐藤先

生」と呼んでいただいています。レスリングを指導している佐藤満教授も「満先生」と呼ばれています。

野呂 改めて振り返ると、僕の競技人生、指導者人生は、このような人たちに巡り会えたことが大きかったです。

佐藤 テニスの世界でもそうです。人と人の接触によって「化学反応」が起きますが、管理が行き過ぎると何も起きなくなってしまいます。

満菌 それこそ日体大から当時無名だった有森さんが新興のリクルートに入りましたが、有森さんが92年バルセロナで銀、96年アトランタで銅と成功したことによって、部全体が活性化していきました。1人強い選手を作ったら指導者はしめたものです。小出一門は積水化学へ移りましたが、その後も97年アテネの世界陸上で、それまでトラックレース中心だった鈴木博美さん(現姓伊東)がマラソンで金メダルを獲りました。この時練習パートナーとして同行していた「Qちゃん」こと高橋尚子さんが「私もマラソン走れるかも」と考えるようになったのです。「毎日一緒に練習で走っている先輩が金メダルなら私も一緒に出場していたら入賞していたかも」と思うのは自然です。そして2000年シドニーの金です。まさに佐藤先生が言う「化学反応」です。

ぼくは岡野先生を取材していた当時、そこまで思い至らずにレースのことを中心に話を聞いていたと思います。でも、野呂先生の話を読まえて考えると岡野先生は指導するときのメリハリの付け方が巧みだったのかもしれない。

交流分析と指導者

満菌 佐藤先生、指導者が選手の個性によってメリとハリを使い分けながら指導する手法を心理学の分野でも説明が付くのでしょうか。

佐藤 私が取り組んでいる研究テーマに「交流分析：Transactional Analysis」というものがあります。人の心の中には5つの人間(自我)が住んでいる、という考え方です。

第1にCritical Parent [CP]。これは父親的な、批判的な親という意味で、「must, have to do(こうあらねばならない)」という強さのようなものです。

第2にNurturing Parent [NP]。母親的な、養育的な親という意味です。

第3はAdult [A]。物事を計算・分析する高く論理的思考でコンピューターのようなものです。

第4はFree Child[FC]。自由奔放な子どもです。

「willやwant(～したい)」という欲求で、これが元気でなければ活力がなくなってきます。

第5はAdapted Child [AC]。これは「いい子ちゃん」です。人から指示や命令されると「Yes, I do.」と言う関係ですが、思考と行動分析の研究を進めていくと、一番危ないのです。指導者に認められたいために「本当は、自分はこうしたいのに」という感情を押し殺し続けて、その感情がマグマのように蓄積してやがて爆発するリスクがあります。

私はこれまで多くの一流の指導者とインタビューしてきましたが、共通しているのは、妥協を許さない厳しい信念と同時に、ユーモアや優しさそしてゆとりのようなものを持ち合わせているということです。選手をただガチガチに管理するだけでなく、ストレスを上手にマネジメントして、本番で実力を発揮させるのです。

野呂 僕はこの話を佐藤先生から教わってから、自分の講義でも活用させてもらっています。

佐藤 これは組織にも当てはめることができません。ACの組織は外れたことはせず、きちりしていますが、上意下達の命令系統が行き届いて、突拍子もないアイデアが生まれてきません。

満菌 その場合は、どちらが気を付けてあげるべきなのでしょう。

佐藤 どっちもどちなのですが、人は生まれた時はFCで、喜怒哀楽を自由に表現しますが、成長する過程でミルクをママからもらわなけれ

ば生きていけないとか、言うことを聞かないとご褒美がもらえないといったことからACが発達していきます。これは生きるために必要な術ではありますが、大人になった時、自分が本当は何がしたいのかということを考え直さなければなりません。「Script」という人生脚本に従って生きていく中で、ACの部分をどうするのかも自分の決断で書き換えなければなりません。

満園 これまで相手に反発したことがない人にとっては大変な決断が必要ですね。

佐藤 そこに大人の論理である「A」が必要になります。どうやって相手と交渉して、自分を納得させるかということです。「決断」と言いましたが、じつは、自分で意識しないで決断はしているのです。ここまで来た決断を覆すで、「再決断」をしなければなりません。ここで人は苦しむわけです。こういうことをスポーツに当てはめて選手に対応しています。

満園 これは極めて重要ですね。大学の選手たちが再決断をしなければならない時期に、指導者との関係性の中で「AC」の関係を続けて「A」の部分を発揮しないまま大学を卒業したら、その先の人生はどうなるのでしょうか。しかもそういう者が、部活の指導だけでなく、教壇に立って子どもに学問を教えることも出てくると考えたらちょっと心配です。

野呂 この問題は、生まれた時や場所にもよるのでしょうか、ある程度子どもの育った環境にも影響してきます。ただ、一流選手になるには、自分を殺さなければならない時もあることを、これから引き出して、「自分はこういうところがあるから、こうしていかなければいけない」ということをどこまで自覚できるかという問題に行き着きます。

満園 陸上競技は個人競技ではあるけれど、日本で生まれた駅伝という競技はどうしてもチームプレーが欠かせないから、自我をある程度殺さなければならない場面は出てきます。駅伝についてはそういうことを踏まえた本当の指導者がいなければ強いチーム作りはできないでしょうね。選手にとっては卒業後の人生に通じる能力が身に付きますね。指導者は選手の心理を読み解く心理学者のような要素を身につけておくべきですね。

野呂 選手には頼りたい人が必要なのだと思います。



2000年 世界的コーチ アーサー・リディアード(NZ/オークランドにて)



*アーサー・リディアード(1917-2004):リディアード氏は多くのオリンピックメダリストの指導に携わり「世界最高の中・長距離コーチ」と言われた人物。

最後に

満園 じつは、僕は今から40年以上前に鹿児島大の教育学部を出ましたが、学生時代は陸上部に所属し、7mジャンパーでした。走り幅跳びと三段跳びをやっていて、体育の教員免許も持っています。でも、どうも僕は違う世界に進みたくて、スポーツジャーナリストの道を選びました。そして、野呂先生がまさに強かった頃にこの世界に入り、レースを目の当たりにしてきました。今回は大変興味深く味のある話を聞かせていただきました。

野呂 僕も今回、自分のやってきたことをこうして振り返ってみて、いろいろ考えるきっかけになりました。陸上の面白さを教えてくれた恩師との出会いや、ライバルの存在が僕の競技人生、そして指導者としての道を照らしてくれたのだと改めて思います。大好きな陸上のおかげ

で飯を食うことができ、幸せ者だと思います。

佐藤 野呂先生の現役時代のレースを実際に取材された満園さんから、野呂先生の走法には数学的思考が関係していたのではないかと話、野呂先生からはこれまでの選手、指導者、研究者というキャリアを通じて選手の自主性を育てていく環境づくりの大切さを知ることができました。貴重なお話ありがとうございました。

